

「明治のナイチンゲール」大関和への知識を深め、 看護の意義を見つめ直すプロジェクトを立ち上げました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



日本の看護の発展に尽力し、「明治のナイチンゲール」と称される大関和。その功績と人物像への理解を深めるとともに、看護のあり方を見つめ直すプロジェクトを発足しました。

健育会グループの看護部は、フローレンス・ナイチンゲールの著書『Notes on Nursing（看護覚え書）』を、看護実践の基本として掲げています。

ナイチンゲールは、看護の礎を築き、専門的な看護教育の確立と衛生改革を成し遂げた、近代看護の創始者です。

『Notes on Nursing（看護覚え書）』には、現代の医療現場においてもなお、本質を捉えた極めて示唆に富む理論が説かれています。

そんな近代看護の創始者であるナイチンゲールの教えを掲げ、日本の看護界に革新をもたらしたのが、「明治のナイチンゲール」と呼ばれる大関和です。

大関和は、ナイチンゲールの教えの“看護覚え書”と、キリスト教精神に基づく愛と奉仕の心を備え、正規の訓練を受けた看護師として活躍し、後輩の育成に尽力しました。

また、派出看護を通じた実践活動を展開し、生涯にわたって日本の看護の発展、さらに専門職として確立させ、社会的な地位向上に貢献しました。

私たちが現在、医療現場において確かな理論に基づく看護活動を実践できているのは、ひとえに大関和の功績があったからにほかなりません。

そこで今回、健育会グループの看護師を対象に、大関和という人物を探求し、看護師としてのあるべき姿を再認識するためのプロジェクトを発足しました。



プロジェクトでは、はじめに大関和への理解を深めるため、「大関和の生涯と看護への貢献 オンライン講演会」を開催しました。

講師は、歴史社会学者・作家の田中ひかるさんです。田中さんは、現在放送されているNHK連続テレビ小説『風、薫る』の原案となった『明治のナイチンゲール 大関和物語』の著者でもあります。

講演では、大関和の生い立ちや近代看護の歴史について詳しくご講義いただくとともに、受講した看護師からの質問にも丁寧にお答えくださいました。



講演後、各病院からプロジェクトメンバーを募り、大関和のルーツを探るため、彼女の出生地である栃木県を訪れました。

はじめに栃木県立図書館を訪れ「大関和を追いかけて」、「大関和の書簡を読む ある派出看護の記録」の二つの展示を見学しました。

見学にあたっては、栃木県立図書館資料課の濱野絵梨子さん、ならびに郷土史家で大田原市文化財保護審議会会長の大沼美雄さんにご解説いただきました。

展示では、大関和の功績をはじめ、明治時代の栃木や東京の様子、女性の社会進出といった時代背景について学びました。あわせて、当時の派出看護の実情や、自筆書簡を通して、大関和と交流のあった人物についても理解を深めました。



大関和の生家があったとされる地に建立された大関和記念碑を訪れた後、メンバーは大田原市那須与一伝承館の特別企画展「近代看護の先駆者・明治のナイチンゲール大関和」を見学しました。



展示の中には、現場で役立つ看護の方法や、患者に接する際の心構えを説いた大関和の著書『実地看護法』の一部を紹介するコーナーもありました。プロジェクトメンバーは、そこから和の看護に対する深い知識と真摯な姿勢をあらためて感じ取りました。

大関和の生まれ育った黒羽藩は、学問の奨励に非常に積極的であり、和は教養を身につけることのできる環境の中で育ちました。プロジェクトメンバーは、そうした黒羽の歴史について学ぶため、黒羽芭蕉の館で開催された企画展「明治のナイチンゲール大関和のふるさと黒羽と医療」を訪れました。



展示されていた黒羽藩の絵師、小泉斐（こいずみ あやる）が描いた「黒羽周辺景観図」や「黒羽河岸近傍見取図」を眺めるうちに、メンバー一同の中には当時の情景が鮮やかに浮かび上がり、まるで大関和が生きていた時代に自分たちがタイムスリップしたかのような心地となって、その功績や関連資料を、より深く感じ取ることができたようです。

その後、プロジェクトメンバーは、大関和の故郷である大田原市の歴史を今に伝える活動を行う大関社中を訪れました。大関社中では、江戸時代に黒羽藩を治めた大関家が甲冑に用いていたとされる組紐を再現し、大田原市の組紐ブランド「大関組紐」として、その伝統を広く発信しています。

見学では、当時の技術を用いて組み上げていく工程や、用いられる四色（紺・萌木・白・紫）の紐に込められた意味について解説いただきました。





大関和の故郷を実際に訪れ、その地域環境や文化に触れることで、和がその土地の風土に育まれながら、後世に名を残す人物へと成長していった背景を感じ取ることができたようです。

時代に翻弄されながらも道なき道を選び、日本の看護の発展に尽力した大関和。その熱い思いに触れたことで、自分たちが携わる看護という仕事には大きな意義があることを、あらためて理解したという声が数多く上がりました。また、看護師であることに誇りを感じたという声も多く聞かれました。

さらに、感染予防に尽力する姿勢は、看護師という立場において極めて重要であることを再認識したという声もありました。

先人たちの努力によって看護の素晴らしさが広く認知されてきたこと、そして過去の偉人たちの功績の上に今の自分たちがあることを実感した方もいたようです。

今回のプロジェクトメンバーは、所属する病院も、年齢も、役職もさまざまでしたが、それぞれが立場を越えて語り合い、「看護とは何か」という本質的なテーマについて、多様な意見を交わすことができたようです。

健育会グループの看護師として、ナイチンゲールや大関和をはじめとする先人たちが築いてきた歩みを、今後もしっかりと受け継いでいってほしいと思います。そのうえで、常に探究心と向上心を持ち、医療従事者としての使命感を育む取り組みを、着実に重ねていってください。